

協同のあ る街づく り

勝部 欣一

(協同総研副理事長
・日本生協連参与)

共立社（鶴岡生協）40周年のお祝い

6月2日行われたこの式典に全国の仲間たちとともに参加し、その機会に発祥地の鶴岡市内の協同施設もバス見学した。

この生協は1956年に田川地区勤労者福対協という組織から組合員1,200人、6坪の店舗で出発し、近隣10～15世帯の家庭班を運動の基礎組織として位置づけ、今や国際協同組合同盟の新しい原則にもなった「参加型民主主義」の原型をつくり出したのである。

そして山形県下の各地域生協を法人格上統合したのが生活協同組合「共立社」であるが、県下の9地域支部は地域名を冠した〇〇生協とよばれ、それぞれ役員会をもち、各地域に対して責任をもつ「地域連邦制」の思想を実行にうつしてきたのである。

この中心であった佐藤日出男君と私は同い年でもあり、発足の当初から私が欧州留学で学んだセルフサービス方式を6坪の店で実行するやら、第1回の全国組織研を鶴岡で行ったときは全員が各家庭班に分宿し、生きた勉強をさせてもらった。

現在、鶴岡生協は組合員数3万人、1,800班で9店舗が市内にあるが、これと裏腹に庄内医療生協（組合員数3万2千人、1,000班）があり2病院と1診療所をもっている。

これに加えて最近両生協はじめ市内の諸団体の協同の力で老人保健施設「かけはし」が社会福祉法人として運営が開始された。100床のショートステイや痴呆の入所と30人が日帰りで入浴などの介護を受ける広くきれいな施設だが、各地でいま組織が始まっている高齢者協同組合の運動のターゲットとしたくなる施設である。

募金運動の先頭にたった方々ですと紹介された人々が、ただニコニコと静かに机を囲んで座っている姿を見て感無量であった。

これら各施設での食堂、ヘルパーなどでの労働者協同組合のメンバーの働きも目覚ましいといわれたのもうれしかった。

昨年オープンしたばかりの750台駐車できる2千坪の「コープこびあ」は最初心配されたが、農漁協も産直品で積極的に協力し、夕方5時半に庄内浜で買い付けされた魚が、その夜8～10時にこの店で買えるとあって、利用結果が進んでいると報告された。

この生協には生産農産物が産地名だけでなく個々人の名前を紙フダに書いてつけて出す。「毎日品評会をやっているようなもんだ、はりあいが出る」と高齢の農家の人々がよく話していたが、まさに「協同のある街」が未来をもふまえて立派に創造されたことをみんなが感じた。

わらび座の出羽三山の山伏と部落民の営みが生々しく演出された藤沢周平原作「春秋山伏記」の総見に感動し、姉妹提携しているイタリアボローニャ生協の代表団と腕を組みカンツオーネなどを合唱しつつ人間の協同の渦にひたつたのである。